
悪魔の契約

明光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悪魔の契約

【Nコード】

N2332N

【作者名】

明光

【あらすじ】

悪魔が存在する場所 悪魔が信じられた時代 悪魔と契約
することは最悪の愚考であり、最大の禁忌 その時代に出でた者
達。 悪魔と契約し投獄された少女 母国を破壊し、籠から飛び
立たんとする宰相陛下 故郷を破壊され復讐に命を使う青年

人物紹介 脱獄

○ゼロ・サイク

悪魔と契約を結んだ少女（自分では悪魔と契約をしたとは自覚していなかった）

男前な性格で言葉遣いも荒い上に、凹凸が小さい為に男に見える（かなり気にしている）

目茶苦茶な悪魔とは幼い頃からの友人

伊達眼鏡を好んで着用

18歳の時、政府によって《悪魔と契約を結んだ》といわれ投獄された

暫くは大人しくしていたがシャドウのせいで脱獄をする羽目になってしまった

「だあああつ！！！触るなっ離れろっ！俺は女だ！！！」

○シャドウ・シフト

ゼロと契約を交した悪魔（自分でも知らないうちに契約をしてしまったらしい）

ゼロの幼い頃に友達になって欲しいと言われてからずっと友人である。

が、いつか自身は友人以上になりたいと思っている

一見悪魔には見えないが正真正銘純血の悪魔

ひと昔前のような服装で顔の右側に刀傷がある

ゼロを脱獄させた張本人でどこかずれている。

「ふん。余の相棒に手を出すとはな。万死に当たる……」と言いたい

とこだが、……………」

「いつか出るかも」

○ディア・シフト

シャドウの弟

とある街で偶然（本人談）シャドウとゼロに会ってゼロに惚れた
天真爛漫でポジティブで明るい。

人間年齢ではシャドウより5つ以上で力も弱く、

ゼロにちよっかいを出すたびにシャドウにやられている

口癖は「っす」

「ゼロさんラブっす愛っす魔界で一番愛してるっす！！！」

> i 1 1 0 0 6 — 1 5 2 5 <

ディア忘れた……

投獄、脱獄、悪魔？ 脱獄（前書き）

脱獄組 1 話目

投獄、脱獄、悪魔？ 脱獄

『投獄、脱獄、悪魔？』

「……………なんで俺がこんな目に…」

シャドウ、会いたいなあ。

「全く、政府の奴も愚かよう？
何もゼロを監獄へ送る事なぞなかるうに。」

そう言う正面には聞きなれた声が聞こえた。
低い声とまだ若いのに年寄り臭いというか古臭い口調

「シャ、ド、ウ…？」

「なんじゃ？」

「幻、だよな？」

だって本人のはずは無い。

ココは監獄。

当然のように看守もいる。

シャドウがこんなところにいるはずは無い。

「何を言うか。お主は童わらしの頃からの親友、このシャドウ・シフトの
声と顔を忘れたか？」

このふてぶてしい笑み、顔の刀傷、薄いベージュ色の髪

「ほんもんつ、だよな……………」

「本物じゃ、ほれ。余はこうしてお主に触れておるだろう？」

シャドウはゼロの両頬に触れて、幻ではない事を示す

「シャドウ、シャドウ、シャ、ド……………」

そう分かったら、急に涙があふれて来て、止まらなくなっていた。
シャドウは何も言わずに俺の頭を抱えていた

「……………お前の前で見つとも無く泣く日が
来るなんて微塵も思わなかったよ。」

「酷いのう。お主が幼子の頃はよく泣いておったではないか。」
「いつの話だ。いつの。」

いや。まじで。相当ちっこい頃の話じゃねえか。

「そうじゃな…………余の記憶が正しければ、

お主が初めて余の前で泣いたのが三歳の頃かの？」

「言わんでええっ！つか、それ赤ん坊の頃じゃねえか！泣いて当然
だろ！」

「聞いたのはお主ではないか」

「うっさい！」

「ほれほれ。看守のやつ等に諫められるぞ？」

「……………っ！その、嫌味つたらしい笑いは確かに本物だな。」

「たまには素直になつたらどうじゃ？」

「……………わかつたよ。シャドウ、ありがとな」

「うむ。いつでも言うがよい。時にゼロ。お主は一刻も早くこの忌々しい監獄から出たくは無いか？」

「出たいに決まつてるだろ？誰が好き好んでこんなところにいるか。」

「そうか。それを聞けて安心した。では出るぞ。」

「は？政府から許可が出たのか？」

「何を言う。そんな訳無かるう。」

んな自身満々に言つなよ……………

自慢できるような事じゃねえし。

「ならどうやって……………」

「脱獄じゃ脱獄。決まつておろうに？」

き、決まつてるのか……………？

「目を瞑つておれよ？お主は見ん方がよい」

「は？」

「はよせい。」

「へ？え？あ、ああ……」

なんなんだ？目を瞑つちゃあ動けないじゃないか……

その時、身体が押しつぶされるような感覚が襲つた。

「うあ、あ？！」

「落ち着け。すぐに収まる。」

シャドウの声と背中を叩いたシャドウの手とで少し痛みが和らいだ

気がした

それから何回かその痛みが襲ったが、すぐ傍にシャドウがいるという事実に関心したのか、その痛みに慣れたのか、始めほど痛くはなかった。

「もうよいぞ。目を開ける。」

耳元のシャドウの声にうつすらと目を開けると監獄では見ることの無い光が入ってきた

「シャドウ……？ココ、どこだ？」

「ココは国外じゃの。」

「……マジで？」

「監獄から逃げた所で国内じゃとどうせすぐに捕まるからの」

「どうやったんだ？」

「少し歩こう。一息ついたら話す。余は少し疲れたのでな」

「はあ？……まあいいか。分かった。その森まで歩こうか」
「助かる。」

>
>
>
>

「ゼロ。ここの木陰に腰を落ち着けるとしよう」

シャドウはそう言う前にどっかりと座って大木に寄りかかる

「おま……ホントに疲れてんのか？」

「当然じゃ。あんな場所に忍び込んだ上に脱獄をしたのじゃ。嫌で

も疲れるわ。」

「…ホントにどうやって出たんだよ。……つか、何でお前はあんなところにいんだよ。」

まさかお前も政府のやつ等に悪魔だなんだ言われていれたのか？」

そう言うとき、シャドウは目を逸らして云い淀んだ

「あ、いや…余は、……その………」

「んだよ……急に言いよどみやがって。」

「い、いや。ゼロ、その、言っても怒らぬか？」

「はあ？」

「だから、お主は言っても怒らぬか、と…」

「お前は怒られるような事をやったのか？」

「余は悪いなどは微塵も思っただけだが、お主にとってはそうかどうか分からぬでは無いか。」

「……怒んねえから言ってみろ」

「本当だな？」

「さっさと言え。」

「……ゼロが投獄されたのは、恐らく余のせいじゃ。」

「………は？」

なんだって？

シャドウのせい？

なにが？

俺が投獄されたのが？

「マジか。」

「ゼロ、お主は政府が騒いでいる悪魔なぞ信じるか？」

「は？…ああ。どっかの王様が狂ったのは悪魔のせいだとか言われているな？」

「そうだな。では、ゼロはそれをどう思っている？」

「どう、って…政府がどう思っているように俺は悪魔なんてありえないと思ってる。」

「……………そうか。まあ、普通はそうじゃな」
「シャドウ？」

シャドウは頬を掻きながら笑っていた。少し悲しそうな顔で。

「では、お主は余が悪魔、といったらどうじゃ？」

「あ、ああ？悪魔？お前、が？嘘…っつか冗談だろ？」

「お主には悪いが事実じゃよ。全く、政府のやつ等も一体どこから嗅ぎつけたか…………」

「待て待て待て待て。お前が悪魔なら何で俺は捕まったんだ？！それなら監獄には俺じゃなくお前が入る筈だろ？」

「ゼロ、お主の左腕の一見刺青に見える傷があるだろ？」

「あるな。いつ怪我したのかは知らねけど」

「それは、お主が余という悪魔と契約したという、証になっておる。悪魔自体は分からなくとも、悪魔と契約した者を監獄に入れたということじゃろつ。」

「全くもって、政府には目が節穴の者しかおらぬ。」

「は、あああああああああ？！…」

シャドウの言葉は途中から俺の頭の中を素通りしていた

んだそれ！？

シャドウが悪魔で？

契約？

この腕の傷が？

「う、嘘だぁ……………」

「ふむ。やはり受け入れられぬか……………
あらかた予想はしていたがココまで驚愕きょうがくされるとは…」

「落ち着いて分析してんじゃねーよ！！！！なら今すぐその契約とやらを解け！」

「無理じゃ。」

「なんで?!」

「お主の契約内容は簡略すると『独りの自分と一緒にいて欲しい』
なのだ。」

すなわち、余と親友でいること自体が契約なのじゃからな」

「……………マジか。」

「事実じゃ。」

俺も長い間親友のシャドウと友達をやめるのは嫌だ。

「……………じゃあ、しゃあないな」

「うむ。おぬしならそう言ってくれると信じておったぞ」

(……………悪魔ツつたら、あの丸くて羽も生えてる……………)

「ひとつ、言っておくが、ゼロ。」

悪魔というのはお主が今考えているような可愛らしいモノでは決してないぞ」

「え。」

何で考えてる事が分かった？

……………そういや、こいつ昔からそうだったな。

「ん？……まさか脱獄した方法って」

「お主の想像通り余の力を駆使してのものじゃ」

「なるほど。」

「まあ、あの監獄は悪魔払いをしておったから多少苦労したかな」

「……よく入れたな」

「ふん。あのような粗末な悪魔払いに余が屈する筈が無かるう。」

「………仮にも政府の監獄だよな？」

「んな簡単なもんなのか？」

「いや、そんなはずは………」

「おい。シャドウ………」

横を見るといつの間にかすすうと寝息を立てて眠っている悪魔の姿が目に入る

「……寝てやがる……」

今更だけど、悪魔も疲れるのか？

つか、幼い頃から一緒にいたコイツが本当に悪魔なのか？

俺はまだ納得できないけど、コイツのおかげであの政府の監獄から出られたんだから、

信じざるをえない。………んだよなあ……

投獄、脱獄、悪魔？ 脱獄
(後書き)

続くかどうかは分からない。
いや、2話目は製作中ですが

人物紹介 亡命

○ユイ

ある大国で宰相を務めていた青年（女）

仕事第一で無愛想であり喋らないし、年相応の顔をあまり見せない……が、親しくなってくると色々と世話焼きのつつこみ屋で饒舌趣味は寝ることと悪巧み

国を離れて自由の身になろうとしたが、今度はエジヤに付きまとわれている

「五月蠅いわね。静かにしてよ。私は眠いのよ。
次、安眠妨害したら殺すわよ?」

○エジヤ＝ドレッサ

一見耳の尖った気ただの弱そうな青年に見えるが正真正銘本物の悪魔（夢魔とも言つ）

おだやかそうな外見とは裏腹に、本性は退屈事が大嫌いな、サディスト

退屈を紛らわす為なら、国の一つや二つを平気で壊そうとする
ユイに憑いているのもエジヤ曰く『この女なら退屈はしなさそう』だから

「ふう〜ん……まあ、彼の夢は一度食い荒らしてみたいな?」

悪夢と破滅「前篇 亡命

——あなたが悪魔？

キミが僕の契約主かい？

そうよ。あなたが悪魔なら、あなたを呼んだのは私。

では、僕は主人であるキミに従おう

——悪夢と壊滅——

「また隣国で反乱が起こったらしい。」

「またか…こうも立て続けに隣国でクーデターが起るといつ我が国で起るかと不安になる…」

「現国王は特に警戒する気もなし…反乱が起ったとして、防ぎようがない」

「宰相様、如何致しましょう？」

「そうですね…国王陛下に警戒の意志はなくとも、いざという時の為に念を入れて兵士達の士気を上げておいた方がいいかと思います」

と、無表情で答えるのは先程『宰相様』と呼ばれた女性だった。

先程から騒いでいるのは、さる王国の国政をまとめる重鎮たち。

そのほとんどが老いた者たちだがその中で『宰相様』と呼ばれた人物は、驚いた事にまだ二十代ととれる若さの女性だった。

彼女の名は『ユイ』それだけ。

名字も何も無く、ただ『ユイ』という

「やあやあユイ君。キミはまだそんな仕事に精を出しているのかい？」

と、ノックもなしに勝手に執務室に入ってきた失礼極まりない人物は、未だクーデターの起っていない隣国の国王の子息…つまり隣国の王子だった

「私が何をしようとも私の勝手です。貴方様には一切の関係もありません」

「冷たいなあ。僕としては未来の花嫁には仕事を辞めて、家庭についてもらいたいものだけど」

「では、その願望を叶えてくれる御嬢様をお探しになられることですね。」

「キミは僕の婚約者だろう？僕の願いを叶えてくれないのか？」

「その様な気はさらさらありませんし、私は貴方様と婚約した覚えなど全くありません」

「さ、流石国王の娘と言われるだけあって相手が王子でも強気だね……」

表情を変えず目線もよこさない自分の婚約者（自称）の言葉に頬を引きつらせながらも言い返してくる隣国の王子にユイは呆れたような表情と視線を思い切り向けて言った

「国王の娘？何を言っているんですか？まさか貴方様もこの私が国王の隠し子であり、そのコネでこの宰相と言う立場に就いていると言うくだらなくも無責任にて大した確証もない噂を信じておられるので？」

それを期待して私の婚約者……と、言っても貴方様が勝手に仰っているだけです。…になられたと言うならいますぐにお止めになる事をお薦めします

……………グラスターさん」

そう一息で言うユイの視界にはとうに隣国の王子は入ってなく、既に存在すら無視している

「はいはい、何かな宰相どの」

「私は疲れたので自室に戻らせていただきますね。」

書類の方は私の机に置いてあるので、よろしく願います」

「はいはい。わかりましたぞ」

「では。」

ユイは呆けている隣国の王子のわきをすり抜け自分の中では信頼性の高い重鎮に声を掛けてから出口に向かう

「あ、後。その王子は今すぐにこの国から自国へお帰りになられる事をおすすめします。」

最近隣国でのクーデターが多いようなので。お気をつけください」廊下へ出ようとしたところで衛兵とすれ違う

「あ。さ、宰相様！失礼ですがご連絡が！..」

「私は良いから、先に中の彼らにお願い。
それと、グラスターさん以外は私の部屋には近寄らせないようにして」

「は、はい。分かりました！」

そうして、ユイが出た後、衛兵が告げた事実^{クレンジイ}に執務室は騒然とし、その後錯乱した客人を抑えるのに一悶着あったという

＝廊下＝

全く、慌しい上に苛立たしい

一体どこから私があクレンジイの国王の隠し子と洩れるのだろう

根も葉もない話だとは言わないがそれにしても最悪すぎる

コネなんてあり得ない。私はこの地位に私の力で伸し上がって、私の力で立っている

ユイは苛々と爪を噛み、乱暴にドアを開けて自室に入る

…そういえば私が出た後に執務室が騒がしかった。と、言う事は『彼』の方は巧くいったのか。

室内を見渡すと、想像通り耳の尖った青年がにこにここと笑ってソファに座っていた

「お帰り、ユイ」

「ええ、ただいま。巧くいったのね。」

「まあね。えーと？コレで2、3…6つ目か。キミは何を考えてこんな事をやっているのかな？」

指を折りながら興味深そうに聞いてくる青年にユイは青年の向かいのソファに腰掛けながら、いともあっさり「さあ？」と答える

「タダの憂さ晴らしかもしれないし、復讐かもしれない。もしかするとこの国を潰す為の下準備かもしれないわね」

「うーん……わからないなあ」

青年はユイの言葉にポリポリと頬を掻いて天井を見上げる。

「ここ近辺の国は潰したし……。そろそろ潮時かしらね」

「この国を潰すかい？」

わくわくと聞いてくる青年に少し呆れながらも「違う」と返す

「潰すのは国じゃなくて国王よ。アレを恐怖に陥れればいくら重鎮たちが優秀といってもパニックは免れないわ」

「流石、ズル賢いね。宰相サマは」

ふふ、と笑って言うユイに青年は意地悪そうな笑みを向ける

「褒め言葉として受け取っておくわ」

「でもアレを壊すって事は殺すのかい？ならキミの手で殺った方がいいんじゃないか？」

「それも魅力的だけど違うわね。私はこの国を他の国と同じ様にあっさり潰す気なんてないわ。

言っただでしょ？『恐怖に陥れる』って。つまりはあなたの得意分野よ。エジャ」

それを聞くとエジャと呼ばれた青年はパツと顔を輝かせて、ユイに言った

「じゃあ良いんだね？ユイ！」

「ええ。いいわよ」

「やった！」

「…ちゃんと帰ってきなさいよ？」

「わかってるよ。」

満足したらちゃんと帰ってくる」

（どのくらいで満足するのよ……）

エジヤの『満足』の基準がわからないユイは目の前で煙と消えた彼の座っていたソファを眺め、本日何度目かとなる溜め息をついた

悪夢と破滅「前篇 亡命（後書き）」

前中後の三篇です。

悪夢と破滅―中篇 亡命（前書き）

前回の続きです

悪夢と破滅「中篇 亡命

>>>>>

「宰相様、宰相様！」

ドンドンドン、と扉を叩く音と冷静を欠いた衛兵の声が聞こえた

「……………んん？」

慌ただし。

一体なんなんだ？

眠い。どうせくだらない用事だろうし、無視しても問題ないか…
それに、まだ朝早い。

「宰相様！宰相様！！」

眠い。寝かせてよ。寝かせなさい。寝かせろ

宰相様、ご起床してください！国王陛下が！！」

……………国王？

……………ああ。エジヤがやったのね

……………エジヤ？

ユイはそこで弾かれた様に、ガバツと起き上がった

「あんの、馬鹿悪魔あつ！！！！」

「さ、宰相様?!」

流石防音の利いているこの部屋でもユイが大声を出したのがわかったらしく慌てる衛兵の声が聞こえる。

ユイはとりあえず着替えてから部屋を出て衛兵をみると、昨日執務室に来た衛兵だった

「一体なに? グラスターさん以外は私の部屋に近寄らせないでって言ったでしょう?」

「も、申し訳ございません! グラスター様は…その、外せない用事がありまして……」

「……………そう。わかったわ。」

で、何? 国王がどうかしたって話らしいわね」

「あ、はい! それが、国王陛下は悪夢にうなされた様に呻き、起床されたらいきなり何かに怯えたように宰相様の名をしきりに呼んでいたのです」

「は?」

あの国王が?
クンジジイ

ありえない。

「衛兵。冗談にしても質が悪いわよ?

なぜ国王様が私の名前を呼ぶの?」

「し、しかしこれは事実なんです」

「……………分かったわ。すぐに行くから待ってなさい」

「は、はい!」

ユイはそう言って部屋に入ると、昨日と同じ様ににこにこことソファに座っているエジャがいた

「やあ、ユイ。昨日振りだね。いい夢は見れたかい？」

「やつぱり……あの悪夢はアンタの仕業だったのね……」

「悪夢？おかしいなあ……。君のはいい夢にしいた筈だけど？」

何を言っているのかな？と笑みを崩さずに言うエジヤにユイは壁に背中を預けたままジロリと睨み付ける

「最っつっつっつ悪な夢だったわよ」

「そんなに子供の頃の記憶が嫌いかい？」

「ええ。記憶から抹消したいくらいにね」

「それは、悪い事をしたね」

「そう言っておきながらもう4回目じゃないの」

「もうやらないとは言っていないからね。それに、あの夢を見ている時の君は年齢相応の表情をしているしね」

「……いい加減にしないと、その耳引き千切る」

「こっ、コワ……わかったわかったよ。もうなるべく子供の頃の夢を見せないよ。」

「絶対。」

「ぜ、絶対、だ。」

大抵の事では応えないらしいエジヤも、大声を出さずに睨み付けながら静かに言うユイに恐怖を覚えたらしく冷や汗をかいている

「破ったら二度と食事をできないようにしてやるわ」

ドンドンドン

「宰相様、まだですか！？」

「……………」

あんたとの話は後回しね。」

「ああ。行つてらっしゃい」

「人払いはしてはいるけど消えてなさいよ。」

「ついでに部屋の外には出ない様にしときなさい。貴方が目撃されたら色々と面倒だわ」

「了解。」

「…………ふう。ホント、退屈しないなあ」

ユイが行った扉の先を見てエジヤは目を細めて笑った

（…でも彼女の機嫌を損ねるのはやめとこ。）

「あ。昨日グラスター、だっけ？に会ったって言うの忘れてた。」

＝廊下＝

「宰相様、何やら話していた様ですけど、誰か客人が？」

突然衛兵の言った言葉にギクリとした

もしかしてエジヤとの会話が聞かれた？

まさか。あの部屋の防音設備は完璧だし、余程の地獄耳じゃないと精々ばそぼそと声が聞こえるくらいで何を話しているかなんてわかる筈がない。

「別に違つわ。今日の会議の議題内容と要点を復唱していただけ」

「あ…。その会議なんですが……………」

「？」

なに？何か嫌な予感がする…

「その…中止になりました」

「中止……………」

確かにエジヤは巧く国王に悪夢を見せたみたいだけど

「会議が中止になる様な事が何かあったの？」

「そ、それは……………」

し、執務室につきました。会議については、中の方々から……………」

「そうね。ご苦労様」

=====

衛兵が言い淀む程の出来事が？いや。衛兵だから言い淀んでいるのか？

「失礼します。」

「宰相殿！」

「グラスターさん…？」

「宰相殿…わしはどうしたら……………」

「落ち着いてください。どうしたんですか？」

入った途端縋りつく様に寄って来た彼にユイは内心驚きながらも冷静に対処する

いつも落ち着いているこの人がこんなにも慌てふためき乱れること

があつたの…？

「一体どうしたんですか？」

「わしは、わしは、悪魔を見たのですぞ！」

「悪魔？……どういう事ですか？」

……まさか、エジヤを見られた？

私はグラスターさんを座らせて何があつたかを聞く

「昨日の事でしたぞ。」

わしは国王陛下に言いつけられ深夜にお部屋に伺つたのです」

「深夜に？」

「はい。」

「…それで？陛下に呼ばれてどうしたのですか？」

「書類を取りに来いという言いつけ通りに行いました」

「そこで、何か見た、と。そう言うことですか？」

ユイが尋ねるとグラスターはこくこくと頷いた

「そうなのです！ふと見ると陛下の枕元には青年が浮かんでいたのです！」

………本当に見られてやがった

ユイは一瞬額に青筋が浮かんだが、すぐに我に帰って言う

「幻じゃないのですか？」

ここは何とかしてグラスターさんの見たエジヤを気のせいと思わせ

なくては

「違います！決して幻などではないのです！！」

「では、何かを見間違えたなどは？」

他の重役が横からいう。それを聞いてグラスターさんはその人物に食らいつく様に掴み掛かる

「違う！なぜ分からんのだ！？」

（……………暫く落ち着きそうもないわね……………）

私はグラスターさんを他の重鎮に任せて国王のいる部屋へと向かう

=====

「国王陛下、お呼びとお聞きました」

「……………！」

「……………」

なんなんだ。あれが国王の姿か。

確かにエジヤは壊したのか。

しかし、何かが違う。

言いにくいが壊れていない。怯え？

……………いや、違うか

国王は黙っている私に予想外の言葉を発した

「……………なぜお前はここに來たのだ？」

「……………？国王陛下が私をお呼びになられたと聞いています」

「違う。お前じゃない。誰でもない、わしが呼んだのは……………」

ああ、尊大な言い様だ。

しかし、国王なのだから仕方がない。

「……………」

国王は怪訝そうな表情をする

まさか伝達の聞き違いか？

ならものすごい失態だ……………」

「お前、名はなんと？」

「……………ユイ、です」

「ユイ……………？」

「はい」

「ゆい、ユイ、ユイ、ユイ、ゆい、……………」

「……………」

ああ、なんだ。急に人の名を連呼して

気味が悪い

「国王陛下、御用件がないのならば、私は下がらせて頂きます」

「ゆい、ああ……………ユイ……………」

（本当に、気味が悪い）

悪夢と破滅―中篇 亡命（後書き）

人の狂った言葉のかき方がわかりません。
『悪夢と破滅』はあと後篇だけです

悪夢と破滅「後篇」 亡命

…………ふん。

ああっ！もう気分が悪い！！

こんな所からは一刻も早く立ち去って自由になりたい！

頭を掻き毟りたい衝動を抑えながら私は執務室に戻る

「……………？グラスターさんはどこに？」

「それが、その……………泡を吹いて、倒れました」

「泡を？」

吹いた？

「それで？今どうしているんです？」

「とりあえず治療室で処置を受けている筈です」

「そう。どちらにしろ、会議が出来なくなりましたね
なら通常通り」

いつも通りに仕事をしようと言おうとする所でボタン、と勢いよく
扉が開く

開いた先には真っ青な衛兵がいた

「さ、宰相様……………」

「はい。」

「西口方面にて爆破、砲撃があったと報告がありました！」

『?!』

衛兵の報告にこの場がざわめく

それはユイも例外ではなかった

まさか、こんな事は予想外だ。

計画にはない

エジヤには部屋から出るなと言ってある

言った所で聞く奴ではないとわかってはいるけれど、寝る人間が少ない午前中にうるつくと言う事はないとは思いつし午前中に寝る事が基本の華街にはあいつは行かない（あいつはアルコールや香などの臭いのキツイ人間が嫌いだ）からこの騒ぎはあいつの仕業ではない
…多少なりとも屁理屈が混入しているかもしれないが

……………西？

「西と言ったら先日来ていた王の子息…どうしたのです？」

ユイが言々と重鎮達のざわめきは別のものになる

しばらくすると、重鎮達の中でも比較的若い重鎮が口を開いた

「き、昨日はあの御方の国の悪事が表に現れテロが起き、城が崩れ落ちたと伝達が来まして…」

ああ。それは正真正銘大半自業自得。情報を流す方はエジヤがして、それに連なつてテロが起きたのか。中々面白い事をする。

「それを聞いた王子は錯乱をした？」

「……はい」

「よく押さえられましたね？被害は無かったのですか？」

「はい。」

「そうですか…よかったです」

ああ、そうか。なら、後ひとつクーデターもテロリズムも起きていない国はここだけになる
つまり、あの王子はこの国にテロを起こしてこの国も潰そうと言うのか

……………面白くない。

なんとも面白くない。

ほぼ確実な事実が組み立てられてこんなにも面白くないのは初めてだ
とりあえず、わたしの道をふさぐ岩は砕かなくてはいけない
子供で壊れかけひび割れた岩だけだ。

「ちょっと、席を外しますね」

「え、宰相様?!」

私は早足で城の最上階へ向かう

■■■■■■■■

最上階につき、下を見下ろすと残念と言っべきか当たると言っべきか。

未だ騒ぎの大本は捕まっていない

「ああ、やっぱり。相手が隣国の王子様だとやりにくいんだねえ？」
「……………エジャ」

「やあ、ユイ」

「……………あんた、グラスターさんに見られていたのね」

「ああ、偶然の事故さ」

悪びれずに言う目の前の悪魔は楽しそうに笑いながら下を見下ろす

「彼、泡を吹いて倒れたってね」

「やっぱり聞いてたの」

「あれ？気付いてたのかい？」

「あなたが大人しく私の部屋にいるとは到底思えないわ」

「なるほど？」

「これ、あなたの仕業じゃないわよね？」

「流石の僕でもそこまで無粋なことはいしなさい。君の面白くないと思う様なことはね」

と笑うが、「もっとも、彼の夢は一度食い荒らしてみたいけどね」と追加で余計なことも言う

「それにしても、あの王子様。もう国もお城も壊れて王子じゃないのに何で早く捕まえないのかな？」

「……………エジャ」

「うん？」

「彼の手元は見える？」

「まあね……………ああ、なるほどねー？王子様、自滅する気満々だ？」

やっぱりか。

「自滅するなら早くしなさいよ」

「おやおや。宰相様がそんな事を言っているのかい？」

「この国の職人は仕事が早いわ。もし、そうでなくともどうせ近々滅びる国よ。一角が消え去っても問題ないわ」

「そうかい。でも、」

あそこに住む国民はどうでもいいのかな？と我よ先にと慌ただしく押し合っている国民をエジヤは指差す

「構わないわよ。別に。本当に生きたいのなら自力で生きる根性を見せてほしいものね」

「本当に、宰相様のお言葉とは思えないね

——で？どうするんだい？この騒ぎに乗じて、王様を殺しちやおうか？」

「……………」

「ユイ？」

「……………私は——」

「失望させないでくれよ、ユイ」

ユイが口を開くとエジヤはユイの背後に回り頬に手を沿えて耳元で囁く

「っ?!」

「僕は君の野心と目的に惚れたんだ。今ここで計画を止めるなんて言われても止まる訳ないだろう

空気の流れが止まらないのと一緒に。砕けた石も戻らない。これもまた然りさ」

「……………」

「君は、僕を失望させたりはしないよね」

「……………あはは、」

「……………」

「あははははははははははははははは！何を、何を言っているの

エジヤ？

私が、この私が今更この計画を止める？馬鹿言わないでちょうだい。あの馬鹿に助けられるようで気に食わないけれど、こんな機会は滅多にないわ？

やらない手はないでしょう？こんな国、どうでもいいのよ。潰れるなり消えるなり残るなり好きにしたらいいわ」

ユイはぐるり、と背後のエジヤに向き両腕を目一杯に広げる
そんなユイにしばらくエジヤは目を丸くしていたが、すぐに口角をあげて笑う

「そう、そうだ！そうだよ、ユイ！やっぱ君は退屈しない。
僕の求めていたものが君の中にあるのかもしれないね」

じゃあ、どうしましょうか？宰相……いいや、我が契約主

もちろん。決まっているでしょう？

そうだね。

悪夢と破滅「後篇 亡命（後書き）」

悪夢と破滅、後編でした。

亡命コンビの話はここで終わらせるか、続けるか苦悩中です。
読んでくださった方はぜひ意見を聞かせてください

人物紹介 報復 (前書き)

三人目の契約者

人物紹介 報復

○クロエ

何かのハーフだがそれが人か人外かは不明。

ヴァンパイアの亜種とも予想されるがそれにしては力が強いらしい性格は普通のそこらにいる苦勞人青年と同じ

悪魔に様々なものを奪われ報復する為に悪魔と契約し、

契約をさせたが双子の悪魔と契約した事で更に苦勞人になった

「今度は、俺が手前ら悪魔を利用してやる」

「おいっ、コラ！走り回るんじゃないやねえ！！おとなしくしてろ！」

○ロア

子供の悪魔だがクロエよりも断然年上

……のだが外見と精神年齢が当然ながら子供な為クロエに甘え、子ども扱いされる。でも年上

基本明るく懐っこいが他人を氣遣う事が苦手でいまいち素直になれない

いつもイルの前に立ってイルを守っている

顔の右の目の下に逆三角形の刺青があり

「人間さんさ、『人間狩り』のあった村の人だよね？」

「クロエー、腹減ったよー。なんか食わして？」

○イル

双子の悪魔の片割れ

ロアとは反対で外見とは裏腹にシビアな意見を言うがたまに電波っぽい事を言う事がある

寡黙で人見知りだが思ったことはズバズバ言ってしまう（クロエ曰く『デリカシーがない』）

凛々しくて恰好いい年上の女性が好みらしい

顔の左の目の下に逆三角形の刺青がある

「……ロア、この人血がどくどくで死に掛ければたんきゅー」

「……クロエ、イルはあの人と話したい。あの悪魔と離して」

> i 1 4 2 4 6 — 1 5 2 5 <

「今度は人間が」前篇 報復 (前書き)

……投稿までが長すぎましたね。はい。
しっかりと反省してます。

しかしまた前後篇か全中後篇になります。
だらだらグダグダですね。はい。ごめんなs(ry

「今度は人間が」前篇 報復

……逃げた。

村のやつらはオレを恨むだろうか

親父、お袋、妹弟たちは、俺を恨むだろうか
村から逃げた俺を。家族にすら背を向けた俺を。

俺はでかい岩に背中を預けて座り目を閉じる

血が体の外に流れ出てくのが自分でもわかる

どうせ逃げ延びてもこの出血量では助かる見込みは薄い。

だったら、あの場で大人しく殺されていればよかった。無駄だった
と少し後悔する

少しすると何かがこちらに近付いて来る気配がし、ぼそぼそ声が
聞こえた

「……………ロア。人が落ちてる」

「ダメだよイル。死んだ人間なんて

どんな病気をもっているかわかったもんじゃないんだから」

「でもロア。この人、まだ生きてる」

「え？」

うるさい……………

静かに休ませろ。

つか誰が病菌もちだ

オレは少し目を開けて話している子供らしき二人を見て固まる

「な……………」

これは、夢か。誰か夢といってくれ
いや。あいつらは死んだ筈だ
けれど、なんて似ている……

「おまえらは、幽霊……怨霊、か？」

そうつぶやくと子供は顔を見合わせて再び俺を向き、くすくすと笑
った

「何言ってるの？人間さん

僕たちは幽霊？ましてや怨霊なんかじゃないよ」

「……そう。イルたち悪魔。

人間の靈魂と一緒にしない」

「あゝあ？そりや悪かったな……て、悪魔だあ？！——っ！」

悪魔という単語に思わず大声を出す

……これもまた後悔した。

「——か、は……っ」

「人間さん？」

「……ロア。この人間、血がドクドク出て死にかけばたんきゅー」

「え？へー。そうなんだ！」

『そうなんだ』じゃねえよ
こちらから見せモンじゃねえ

「人間さんってさ、そこを……ずーっと行った方の村の人だよね？」

「ああ……？それがどうした」

「あれって、人間狩りでしょ？生き残りって人間さんだけ？」

「あ………？『人間狩り』？」

「ロア。人間は普通知らない」

「あ。そっか。人間狩りっていうのはね、僕らがー…っていうか、大人達が何百年かに一度、人間の肉体と魂を喰らって力を蓄えるんだ。」

それから種族争いの為の殺し会いに出掛けるんだ。それが僕らの間では『人間狩り』って呼んでるね」

………は？

待て。待て待て待て…

それは、そういうことは、

俺は、俺たちは…

「手前から悪魔に、食材として襲われて…意味も成さず殺されたつ…事か…」

「少なくとも意味は成してるよ？」

大人達は君達人間を喰べて力を蓄えてる。少なからず僕たち悪魔に貢献してるよ」

「るっせえ！それは結局俺ら人間は手前らの栄養剤…つ…事かよ！？」

「うん。そうだよ？」

「な、……、て…」

「でも仕方無いよね？結局君達人間は悪魔にとって食べ物みたいなものなんだから」

キレた。『なにが』かは見当もつかないがとにかく俺の中で何かがキレた。

俺は無理矢理立ち上がって喋っていた方の餓鬼の喉元を掴んで俺が寄り掛かっていた岩に思い切りぶつける

「?!か、っは……………うぐ……………」

「ロア……………っ」

「もう片方、動くんじゃねえ」

「…!」

「手前から悪魔にどんな芸当が出来るか知らねえがおかしな事をした
ら即こいつの喉を潰す」

「ロア……………」

「い、る……………うごか、…な……………」

「手前等は、人間共を利用したな。なら、今度は人間が手前等を利用
してやる」

「そな、こ…、でき、わけ……………」

「出来なくともやってやる。」

俺は餓鬼の首から手を離して変わりに首筋に乱暴に噛りついた
鉄の独特の味が口内に広がる。最後にやったのはどのくらい前だっ
たか。

久しぶりの味は歎美なほど甘^{うま}かった

「うぐっ……………」

「……………!」

「あ、う……………」

俺は餓鬼の首筋を最後にひと舐めして離れ、崩れ落ちる餓鬼を見下
ろした

「そんな、…ヴァンパイアはずっと前に絶滅^{きえた}って……………」

「純血種はな。亜種はそこら辺にゴロゴロいるんじゃないの?」

「……………!」

「今度は、俺が手前等を利用、や……………」

目が廻る。ぐるぐる、ぐるぐると

足が崩れ男は地に倒れ込んだ

「あ…… ロア、平気？」

「うん。大丈夫……」

「おかしい。」

「何が？」

「イル、あの人間に命令されて動けなかった。ロアも、首絞められてたけど死にかけの怪我人相手。

何も出来なかったのおかしい」

「だから、それはヴァンパイアだから……」

「いくらヴァンパイアでも亜種。純血じゃない。しかも深手。」

「……… 確かに。おかしいね」

「ロア、どうする？」

「どうするも、イルが見つけたんだろ」

「馴れたのはロア。」

「………」

「………」

「「………」」

「持って帰ろうか」

「うん」

「今度は人間が」前篇 報復 (後書き)

とりあえずここまでで。

この先の展開もちゃんと考えて頭と携帯に入れています
大丈夫だ。問題ない

「今度は人間が」中篇 報復 (前書き)

ようやくデータが復活した……

前回の投稿から約一年たっていますが続きです。

「今度は人間が」中篇 報復

「…………ん、んあ……」

どこだ、ここは。感覚からいって死んじゃあいないはずだ。

……………あの出血量でよく生きてたな。俺

「……………?!」

不意に横を向くとさっきの悪魔の片割れがイスに座っていた
目が合うと片割れはゆっくりと後ろを向いて携帯ゲームをしている
もう片方を呼んだ

「…………ロア。人間起きた」

「えっ、本当？すつごいなあ〜。」

あんな大怪我で死に掛けたのにもう目が覚めたんだ！

「…あ、てめえ、ら……………」

言葉の続きを言う前に起き上がりかけた俺を元気なほうが押さえつける

「ほらほら、起きちゃだめでしょ？本当に生きてる方が不思議なんだから。」

それよりも。ね、人間さん？僕らが協力してあげる」

「……………は？」

「僕らが、人間さんの復讐に協力してあげるよ」

「馬鹿か手前は。俺が報復してやりたい相手は悪魔だ。手前らも対象に入ってたぞ」

「不可能。タダの亜種ヴァンパイアが一人つきりでイル達悪魔に復讐するなんて無謀にも程がある

亜種なんかにイル達がやられるわけない。傷ひとつつけられないのが関の山」

「う、ぐ……………ッ」

「あつはは！さすがイル容赦ないねえ！

でさ、人間さんはどう？イルのこの言葉を聞いてまだ僕らの協力はいらない？」

くすくすと笑いながら俺の顔を覗き込んで楽しそうにたずねる

……………ッ！こうなりや自棄だ！

「わーったよ！頼む、協力してくれ！」

「うん。いいよ！」

そうは言ったもののこれからどうすりやいいんだ

あいつらが手伝うつつても所詮はまだ子供だろ？なんか出来るたあ思わねえし

「……………イルたちは役に立つ。それに、人間よりずっと、長く生きる。」

「……………んな……………」

「あはっ！人間さん顔に思ってることがまくりだよ？

『僕たちは子供だから役に立つかわからない』ってね」

「そ、なことは……………って、なに人の上に乗ってんだよ！！……………」

「んっ？いや、ちょっと血をもらおうと思って。」

「はあ？」

「いいから血をちょうだいよ。そうじゃないと契約できない」

「……………『契約』？」

「説明はあとあと。いいから抵抗しない、のっ！」
「う、お…お?!」

ガブッ

「痛えっ！」

「あ、あれー？もつと強くなー？」

「あぐっ！………やめいっ！」

思い切り噛み付いてくるクソガキを起き上がって精一杯の力で引き剥がす

「あ！ちよつと？なにをするの!!」

「うつせえ！餓鬼の力で噛み付いて血がでるか！」

「でも人間さんに噛まれたら僕は血が出たよ？」

「体格と年齢としの差を考えろ！」

「え？人間さん200歳以上いつてるの？」

「行くか！俺はただけ若作りの年寄りだよ?!」

「え？でも、僕らもうすぐ190歳だよ？ね、イル？」

「うん。正確には187歳」

「ん、な……」

「ねえ、イル？これってどう言うこと？」

「人間は、イルたちと違って寿命が短いし、身体の成長能力は妙に早いから」

「おいっ！『は』ってなんだ！『は』って!!」

「人間は、寿命が短い。だから大した経験もしないで死んでいく。

図体からだばかり強大になっても戦闘能力は大したことなかったり

一頭がいい（『天才』）ともてはやされていてもそうでもない。むしろ混乱を招くだけだったり。

身体からだが大きくなって中身うちみまで成長するのは一稀有（とても稀）。」

「……………」

ズバズバと言い返しの仕様のないことを無表情で言う片割れに啞然として言葉が出なくなる

男は思わず元気な方の耳に顔を近づけて小声で言う

「おい。お前の片割れなんか凄えこと言ってるぞ……………」

「うん…。僕も時々ビックリしてる。」

「身内にまで引かれるってどんだけだよ……………」

「え？イルはあれが通常運転だよ？」

「あれでいつも通りなのかよ」

「と。まあそんな事はおいというて、血をちようだい？」

「結局話はそこに帰ってくるのか！？」

「戻るも何も、そもそも血をくれなきゃ何も始まらないよ？人間さん。」

「つて、ことであー、」

「ッ待て！わーったわーったから！おい片割れ、ナイフ寄越せナイフ！」

再び俺の首筋に噛み付こうとする元気なほつを引き剥がして片割れのほつを向く。

と、目の前にはナイフの柄がいつの間にか突きつけられていた

俺は厭味を言っただけでナイフを受け取るが、片割れのほうからも厭味が帰ってくる

「準備がいいなあ？おい片割れよ」

「あなたが素直に大人しくロアに血を吞ませると思えない。だから準備してただけ。」

早くそれでどうにかして、ロアを待たせないで」

「へいへい、っと……………ッ！」

催促されるままにナイフを手の甲に添えて引く

これくらいか？と手の甲を元気な方に見せると首を横に振られる
それを見てもっと深くナイフを入れると傷口がぱっくりと割れて見
る見るうちに手の甲が血に染まり、やりすぎたかと後悔する

「うん。そのくらいでいいや。んじゃ、いったきまーあす」

「……………ッく、」

元気な方は真つ赤な舌を出して零れそうな血をなめとる

それだけならいい。それだけならいいのだが、目の前のヤツは傷口
を吸ったり舌を押し付けてくるので余計な激痛が腕をかける

（こ、このガキ……………！わざと傷口を刺激してやがる！！）

「ッお、おい……………いい加減に……………」

「んむあ？……………ぶあ、うん。そうらね。はい、次はイルね」

「うん。」

「お…っ、おいっ！そいつにもやるのか？！」

グイッと勝手に片割れに俺の手を渡すガキの頭を思わずもう片方の
手で鷲掴む

「とーおぜんじゃん！僕はニコイチ？っていつの？どこでなにを
しようとも二人一緒なんだから。」

契約でも仲間はずれになんかできないよ」

「そういうこと」

あんな事を言っている間にも俺の開いた傷からは血が流れて再び甲
が血に染まり指先から零れそうになる

片割れはそれを指ごと口に含んで舌を這わす

「……………っ！」

「わお！イルってばだいた〜ん！」

相手は子供とわかっていても温^{ぬる}い口内と妙に巧い舌遣いで体がはねる

「ん、ちゅ」

そんな調子で残りの血のついた指と甲は丁寧にもなめとられる
しばらくそれに耐えていると片割れは「もういい」と呟く
それを聞いて知らずの内に力を入れていた肩から力を抜く

「……………っ！おわったか……………」

「うんっ！ちゃんと証もできてるね！」

「うん。」

「は？」

喜々とした声で俺の手を見るガキ共に釣られて甲を見る
途端に自分の顔が引きつったのがわかる

「でもイル、まだ完璧じゃないから薄いねえ……………もう少しやっちやう？」

「うん……………でも、人間の負担が増えるだけだから。この位だと思っ」

「イルってばやっさしい！」

「ロアに褒められた…、嬉しい……………」

「オイこら待て。何勝手にトリップしてやがる。」

二人の世界に入りかける元気な方の頭を鷲掴んでこっちの世界に引き止める

「あ。ごめんね？」

「ゴメンはいいからコレの説明をしろ」

俺の手は先刻まで血が流れていた。

けどこいつらが血をなめとると血は止まって傷すらも塞がっていた
その代わりに刺青の様な痣のような紋様が手の甲にできていた

「ん、とね？それは、『契約の証』っていつてね、人間さんと僕ら
が契約したって事を示してるんだ」

「ふんふん。それで？」

「え？説明足りない？」

「説明不足にも程がある」

「んー、…あつ！そうそう。その証はね悪魔……じゃなかった。僕
達が血をもらったところに行けるんだ」

「それで？」

「でもね、悪魔がみんなそういうわけじゃないんだって！僕たちみ
たいに血をもらって共同体になるのもいれば、別の何かをもらって
契約をする悪魔もいるんだよ！」

「証つつーもんについてはよくわかった。で？」

「え？まだ足りない？」

「お前等、さつき俺の負担が増えるだなんだ言ってただろうが！」

「ああ。なんだ、そんなこと？」

「そんなこと……って」

「人間さん、必然的に悪魔ビクモ二人と契約をしちゃったじゃん？

で、僕らはまだ子供だからいいけど、本来『悪魔契約』っていうの
は悪魔一人だけでも人間にはすごい負担なんだ

だから、人間さんが苦しくない様に不完全契約したってわけ」

「……………今更ながら、契約する必要あったのか？」

「僕らは人の世界に興味津津なんだ。でもね、困ったことに僕ら悪

魔は器無しじゃこつちの世界に長くいられないんだ」

「だから、ここぞとばかりに力が欲しい俺と契約したっつーことが」
「ま。平たく言っちゃえばそうゆうことだね」

見事にあっけらかんとした目の前の悪魔に頭がくらくらした。
もういい。考えるのが面倒になってきた

「……いや、まあ……諸々言いてえ事はあるが……よろしくするか」
「……、あ」

「うん。よろしくね」

「そっちのも、……おい？」

「……ロア、」

「うん？どうしたの、イル？」

「これ以上ココにいと危ない。」

「え？」

「とっても強い……こっちに來てる」

「強い……？」

「膨大に膨大で……ロア、早く逃げよう。イルはとても怖い……人間も早く……！」

「………悪魔か？」

『膨大な力』と聞いてざわりと背中に何かが走る
頭が真っ白になる

俺の意識は途絶えた

「今度は人間が」中篇 報復 (後書き)

結局前中後になりましたね。脱獄があっさりしすぎたのか^^；
その分脱獄は続編に入っています；

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2332n/>

悪魔の契約

2011年12月6日14時55分発行